

# 大学適応度から見る学習成果

## —初年次英語プレースメントテストと適応調査に関する分析—

### University Adjustment and Learning Outcomes: Analysis of English Placement Tests and Freshman Survey

井上 加寿子\*

Kazuko INOUE

#### 抄 録

本稿では、関西国際大学において英語プレースメントテストとして実施されている G-TELP の上位・下位別の特徴および第 1 回・第 2 回受験時の得点変化と、同大学で 1 年次生を対象に実施されている適応調査との関連について報告する。調査の分析結果より、大学入学時の英語プレースメントテストのスコアが高く、かつ入学後にスコアが上昇している学生の特徴として、(1) 高校での成績が上位であること、(2) 高校での適応度が高いこと、(3) 大学入学後の学内外での学習時間が長いこと、(4) 外国留学に対する意識が高いことが明らかとなった。中でも、英語プレースメントテストの得点変化と最も関連があるのは、学生の学外での学習時間の長さであることがわかった。

#### 1. はじめに

グローバル化が急速に進展した昨今、国際社会で活躍していくことが望まれる人材の育成の一環として、日本の高等教育において英語科目に力を注ぐ大学は少なくない。2003 年に文部科学省により『英語が使える日本人』の育成のための行動計画<sup>1)</sup>が策定されて以降、大学入学選抜試験において英検や TOEIC, TOEFL, ケンブリッジ大学英語検定試験などの外部検定試験結果を活用することが促進されてきており、大学入学後の英語科目についてもこれらの検定試験を採用する大学が増えてきている。

前稿井上 (2011) では、高等教育における英語教育の重点化との関連から、関西国際大学人間科学部を例に、英語プレースメントテストとして実施されている G-TELP のスコアの変化と、2009 年度入学の 1 年次生を対象に実施された適応調査の項目との関連を見た。その結果、学生の入学時の留学に対する実現意識の高さと入学後の英語力の上達に関連があることが明らかとなった。本稿では、対象を 2011 年度入学生 (人間科学部および教育学部) に広げ、同様の観点から英語プレー

---

\* 関西国際大学高等教育研究開発センター 教育総合研究所学内研究員

スメントテストの得点変化と適応調査の回答傾向との関連について見ることを目的とする。具体的には、(1) 第1回および第2回受験時の英語プレースメントテストのスコアの変化と、上位・下位別の特徴について、(2) 特に、前稿で扱った留学等の英語学習の動機付けに加え、大学入学以前の高校での適応度や、大学入学以降の学習時間や学習習慣と英語プレースメントテストの得点変化との関連について分析を行う。

## 2. 方法

### 2.1 英語プレースメントテスト (G-TELP)

関西国際大学では、例年、英語科目の習熟度別クラス編成を目的としたプレースメントテストとして、G-TELP (General Tests of English Language Proficiency, 国際英検ジーテルプ) を全新入生を対象に実施している。G-TELP は、GRM (Grammar), LST (Listening), RDG (Reading) の各セクションが100点ずつの計300点満点の試験であり、学生は入学以降、春学期の英語科目のクラス分けを目的とした第1回プレースメントテストを4月(春学期開始前)に、秋学期のクラス分けを目的とした第2回プレースメントテストを7月(春学期終了時)に受験する。

2011年度第1回英語プレースメントテストは、2011年4月5日に実施され、459名が受験した。また、2011年度第2回英語プレースメントテストは、2011年7月21日に実施され、444名が受験した<sup>2</sup>。各テストについて30点ごとの度数分布を示したものが表1および図1である。これより、第1回、第2回ともに、得点の分布はほぼ正規分布に従っていることが読み取れる。

表 1. G-TELP 度数分布

データ区間 (30点)	TTL (G+L+R) (第1回)		TTL (G+L+R) (第2回)	
	頻度	累積 (%)	頻度	累積 (%)
0	0	0.0%	0	0.0%
30	0	0.0%	0	0.0%
60	5	1.1%	3	0.7%
90	67	15.7%	39	9.5%
120	126	43.2%	115	35.4%
150	122	69.9%	114	61.2%
180	85	88.4%	88	81.0%
210	38	96.7%	53	93.0%
240	15	100.0%	21	97.7%
270	0	100.0%	10	100.0%
300	0	100.0%	0	100.0%

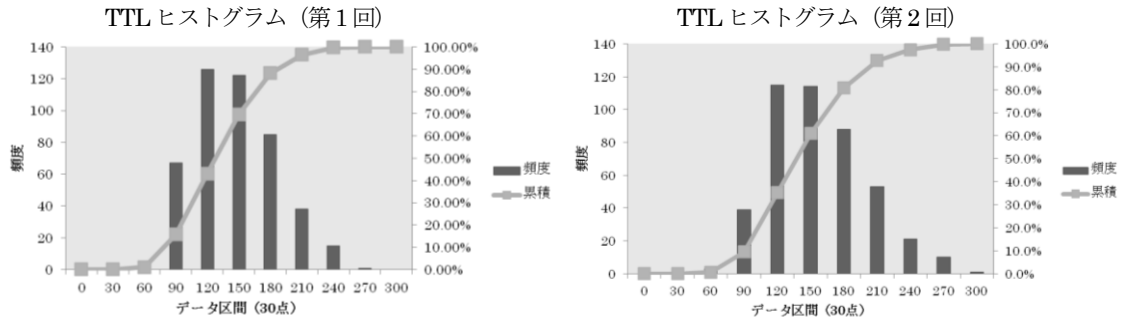


図 1. G-TELP ヒストグラム

2011 年度実施のプレースメントテストの基本統計量について示したものが、表 2 および表 3 である。第 1 回の平均は 133.1 点、第 2 回の平均は 144.4 点であり、第 1 回と第 2 回を比較すると、全体で 11.3 点の平均スコアの上昇が見られるが、第 1 回よりも第 2 回の方が得点のばらつきが若干大きくなっている。各セクションの得点について第 1 回と第 2 回を比較すると、同様に GRM, LST, RDG のそれぞれに平均点の上昇が見られるが、第 1 回、第 2 回に共通して GRM が最も平均点が高く、RDG がそれに次ぎ、LST は最も低いという特徴が見られた。

表 2. 基本統計量 (第 1 回)

	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
平均	48.7	40.2	44.1	133.1
標準誤差	0.712	0.680	0.825	1.834
中央値 (メジアン)	50	40	40	130
最頻値 (モード)	50	40	40	105
標準偏差	15.253	14.561	17.669	39.290
分散	232.652	212.037	312.194	1543.733
尖度	-0.431	0.086	-0.425	-0.346
歪度	0.112	0.411	0.370	0.412
範囲	80	85	90	200
最小	10	10	0	50
最大	90	95	90	250
合計	22375	18435	20260	61070
標本数	459	459	459	459

表 3. 基本統計量 (第2回)

	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
平均	52.9	44.3	47.3	144.4
標準誤差	0.934	0.689	0.840	2.036
中央値 (メジアン)	50	45	45	137.5
最頻値 (モード)	40	45	50	130
標準偏差	19.677	14.528	17.695	42.899
分散	387.172	211.072	313.108	1840.288
尖度	-0.389	0.342	-0.368	-0.170
歪度	0.350	0.369	0.266	0.479
範囲	100	95	95	245
最小	0	5	0	40
最大	100	100	95	285
合計	23470	19650	21000	64120
標本数	444	444	444	444

## 2.2 第1回・第2回の得点変化

第1回および第2回の共通の受験者422名(欠席者を除く)について、得点変化の詳細を見たものが表4および表5である。これによると、TTL (GRM, LST, RDGの総合得点)の平均は、第1回の131.2点から第2回の144.6点へと13.4点上昇しており、t検定の結果、有意差が見られることが確認できた。GRM, LST, RDGの各セクションにおいても、第1回と第2回を比較すると4点程度平均点が上昇しており、いずれにおいても有意な得点の伸びが確認された。このことから、学生は、大学入学以降英語学習の成果を上げているといえる。

表 4. 平均点

	第1回	第2回	差	有意差
GRM	48.4	53.0	+4.6	あり
LST	39.7	44.3	+4.7	あり
RDG	43.2	47.3	+4.1	あり
TTL	131.2	144.6	+13.4	あり

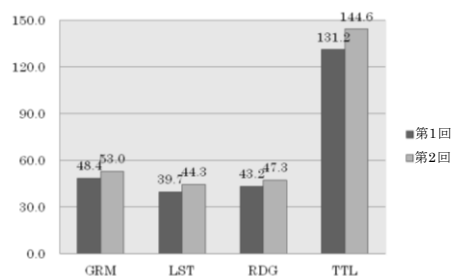


表 5. t検定結果

	TTL (G+L+R) (第1回)	TTL (G+L+R) (第2回)
平均	131.2	144.6
分散	1415.220	1819.483
観測数	422	422
ピアソン相関	0.740	
仮説平均との差異	0	
自由度	421	
t	-9.379428847	
P(T<=t) 片側	2.07451E-19	
t 境界値 片側	1.648481058	
P(T<=t) 両側	4.14901E-19	
t 境界値 両側	1.965614714	

P(T<=t) < 0.05

⇒有意差あり

### 2.3 スコアの換算

各回のテストの出題内容や難易度の相違を考慮し、G-TELPの受験結果について、300点満点の素点から各回の平均点と標準偏差を基準としたzスコアに換算した。第1回および第2回受験時のzスコアの変化を見たものが図2および図3である。図2より、第1回と第2回を比較すると、全体としてzスコアは上昇していることがわかる。しかし、第1回で平均点以上の得点(zスコア $\geq 0$ )であった者は、第2回でも平均点以上の得点を取得しており、第1回で平均点未満(zスコア $< 0$ )であった者は、第2回でも平均点以下である傾向が読み取れる。また、図3より、第1回と第2回のzスコアの差はほぼ正規分布に従っていることがわかる。具体的数値を見ると、422名中、0.5から1.0ポイントの範囲でスコアが上昇した者が110名(26.1%)と最多であり、0.0から0.5ポイントの範囲でスコアが上昇した者が106名(25.1%)とそれに次ぐ。2.2節より、第1回と第2階で有意な得点の伸びが確認されたが、詳細には、全体で0.0から1.0ポイントの小さな範囲でスコアが伸びている学生が過半数(51.2%)を占めることが明らかとなった。

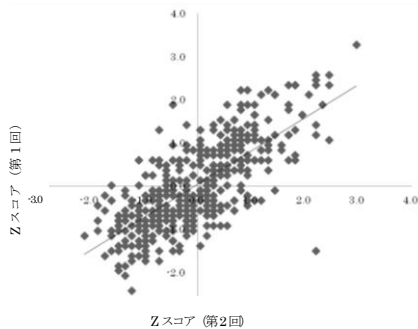


図 2. zスコア

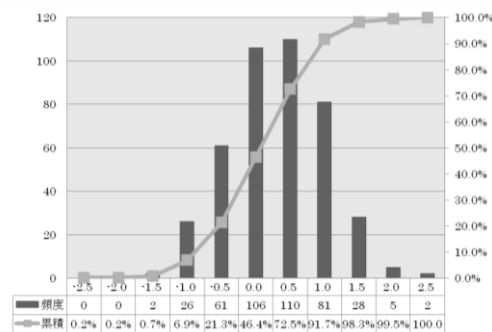


図 3. zスコアの変化 (第1回・第2回)

## 2.4 上位・下位別に見た得点変化の特徴

次に、第1回受験時のzスコアを基準に、受験者422名を平均点以上(zスコア $\geq 0$ )の上位群と平均点未満(zスコア $< 0$ )の下位群に分けて詳細な特徴を見たものが表6である。上位群(198名)の平均点は162.5点、下位群(224名)の平均点は102.1点であった。ここから、分布は下位群の方に偏っているが、上位群に比べ下位群の方が得点のばらつきが小さいことがわかる。

第1回受験時の上位群と下位群別に、第2回受験時のzスコアの変化を見たものが表7である。第1回上位群では、第2回でスコアが上がった者は全体の22.3%、スコアが下がった者は全体の24.6%で、スコアの下降傾向が見てとれる。一方で、第1回下位群では、第2回でスコアが上がった者は全体の33.6%、スコアが下がった者は全体の19.4%で、スコアの上昇傾向が見てとれる。そして、第1回上位群で第2回でスコアが上がったグループは、変化の平均が0.5であるのに対し、第1回下位群で第2回でスコアが上がったグループは変化の平均が0.6と、上位群に比べ下位群の方がスコアの上昇の幅が大きい。また、第1回上位群で第2回でスコアが下がったグループは変化の平均が-0.6であるのに対し、第1回下位群で第2回でスコアが下がったグループは変化の平均が-0.5と、下降の幅も小さい。このことから、第1回と第2回のスコアを比較すると、第1回受験時の上位群に比べ下位群の方が、第2回受験時にスコアの上昇が顕著な傾向にあるといえる<sup>3</sup>。

第1回受験時の上位群・下位群別のスコアの変化について、さらに詳細を見たものが表8である。第1回から第2回のスコアの変化が $\pm 1.0$ の範囲(B1・B2グループおよびC1・C2グループ)に、上位群では84.8%が、下位群では85.7%が含まれており、上位群・下位群ともにそれぞれの8割以上が小さな変化の範囲にとどまっていることがわかる。一方で、第1回から第2回で $\pm 1.0$ 以上の変化を見せる者(A1・A2グループおよびD1・D2グループ)も少なからずおり、今後の要検討課題であるといえる。具体的には、入学時には上位であったが入学以降大きくスコアが下がっている者(D1グループ、9.6%)や、逆に、入学時には下位であったが入学以降大きくスコアが上がった者(A2グループ、12.5%)にどのような特徴が見られるのかを分析することによって、スコア上昇・下降の要因は何であるのかといった点を解明し、スコア上昇者あるいはスコア下降者に対する学修支援の具体的方策に活かしていく可能性が考えられる。

表 6. 上位群と下位群 (第 1 回)

	第 1 回		
	上位群	下位群	全 体
平 均	162.5	102.1	131.2
標準偏差	24.516	18.231	37.619
最 小	135	50	50
最 大	250	130	250
標本数	198	224	422

表 7. 変化の平均

第 1 回	第 2 回			変化の平均
	得点変化	人 数	(%)	
上位群	アップ	94	(22.3%)	+0.5
	ダウン	104	(24.6%)	-0.6
	計	198	(46.9%)	+0.1
下位群	アップ	142	(33.6%)	+0.6
	ダウン	82	(19.4%)	-0.5
	計	224	(53.1%)	+0.2
	合 計	422	(100.0%)	+0.1

表 8. 得点変化

第 1 回	第 2 回	第 2 回			
		得点変化	グループ	変化の度合い	人 数 (%)
上位群	アップ	A1 (++)	$x \geq 1.0$	11 (5.6%)	
		B1 (+)	$0 \leq x < 1.0$	83 (41.9%)	
	ダウン	C1 (-)	$-1.0 \leq x < 0$	85 (42.9%)	
		D1 (—)	$x < -1.0$	19 (9.6%)	
	計			198 (100.0%)	
下位群	アップ	A2 (++)	$x \geq 1.0$	28 (12.5%)	
		B2 (+)	$0 \leq x < 1.0$	114 (50.9%)	
	ダウン	C2 (-)	$-1.0 \leq x < 0$	78 (34.8%)	
		D2 (—)	$x < -1.0$	4 (1.8%)	
	計			224 (100.0%)	
	合 計			422	

### 3. 適応調査から見る英語プレースメントテストの得点変化

#### 3.1 適応調査

次に、関西国際大学高等教育研究開発センターが実施している適応調査と英語プレースメントテストとして実施している G-TELP の得点の関連について扱う。関西国際大学では、大学がどのような学修支援や教育サービスを提供していくべきかを明らかにするための基礎資料とする目的で、学生の大学への適応過程に関する調査を実施している。主な設問内容は、学習習慣や学習動機などに関するもので、設問数は全部で 35 問である。2011 年度第 1 回適応調査は 2011 年度入学の 1 年次生を対象に 6 月に実施され、462 名が回答した。

本節では、全 35 問のうち、学習習慣に関する設問として、大学入学以前の高校での成績や適応度について問うもの、学内外での学習時間を問うもの、英語の学習動機と関連が深い項目として、外国留学と外国旅行に対する意識を問うものなど 6 項目をとりあげる。適応調査のこれらの 6 項目の回答平均を、第 2 節で扱った英語プレースメントテストの得点変化別に見たものが表 9 である。適応調査のすべての項目について、上位群は下位群と比較してポジティブな平均値を示す結果となった。以下、各項目について詳細を見ていく。

表 9. 適応調査平均 (得点変化別)

G-TELP	適応調査	高校成績	高校適応度	学習時間 (学内)	学習時間 (学外)	留 学	外国旅行
		上位群	アップ	3.0	3.2	1.9	2.3
	ダウン	3.0	3.2	1.7	2.0	2.6	4.0
	計	3.0	3.2	1.8	2.1	2.8	4.0
下位群	アップ	3.4	3.1	1.5	1.8	2.5	3.5
	ダウン	3.5	2.9	1.5	1.6	2.4	3.8
	計	3.4	3.0	1.5	1.7	2.5	3.6
全体		3.2	3.1	1.7	1.9	2.6	3.8

#### 3.2 全体の特徴

##### 3.2.1 高校での適応度

高校での成績に関する設問は、「あなたの高校での成績は、学年全体を基準にして比べると、だいたいどのくらいでしたか」と問うもので、学生は、「1. 上位の方だった」、「2. 中の上ぐらいだった」、「3. 中ぐらいだった」、「4. 中の下ぐらいだった」、「5. 下位の方だった」、「6. わからない、覚えていない」から最もあてはまるもの 1 つを選んで回答する。高校での適応度に関する設問は、「あなたの高校時代の生活についていかがですか。あなたにとって次のことがらは、どの程度あてはまりますか」というもので、高校での学習状況、友人関係、健康状態等に関する a から d までの 4 つの下位項目について問うものである。学生は各項目について、「1. あてはまらない」、「2. どちらかといえばあてはまらない」、「3. どちらともいえない」、「4. どちらかといえばあてはまる」、「5. あてはまる」と回答する。



はまる」から最もあてはまるもの1つを選んで回答する。ここでは、そのうち「高校時代、学習は順調に進んでいた」という項目を取り上げる。

高校での適応度について、第1回・第2回英語プレースメントテストの得点変化別に見た各設問の回答の割合を図4に示す。高校での成績に関する設問では、第1回英語プレースメントテスト上位群（回答平均3.0）の方が下位群（回答平均3.4）に比べ、成績が上位の方だったと回答した。得点変化別では、上位群では大きな差は見られなかったが、下位群では第1回・第2回英語プレースメントテストでスコアがアップしたグループ（回答平均3.4）はダウンしたグループ（回答平均3.5）に比べ高校での成績がよかったと回答した。回答者の割合は、「1. 上位の方だった」、または「2. 中の上くらいだった」と回答したのが、上位群では、スコアがアップした者の35.2%（それぞれ16.5%、18.7%）、スコアがダウンした者の35.6%（それぞれ7.9%、27.7%）であり、3分の1以上が高校での成績がよかったと回答した。一方で、下位群で高校での成績がよかったと回答したのは、スコアがアップした者の23.7%（それぞれ6.7%、17.0%）、スコアがダウンした者の27.1%（それぞれ8.6%、18.5%）であり、全体の3割に満たなかった。

高校での適応度に関する設問では、第1回英語プレースメントテスト上位群（回答平均3.0）の方が下位群（回答平均3.2）に比べ、高校時代学習が順調に進んでいたと回答する傾向にあった。得点変化別では、上位群では大きな差は見られなかったが、下位群では、スコアがアップしたグループ（回答平均3.1）の方がダウンしたグループ（回答平均2.9）に比べ学習が順調であったと回答した。回答の割合は、「4. どちらかといえば順調だった」、または「5. 順調だった」と回答したのは、上位群では、スコアがアップした者の44.6%（それぞれ33.7%、10.9%）、スコアがダウンした者の41.8%（それぞれ30.1%、11.7%）であり、4割以上が高校での成績が順調であったと回答した。それに対し、下位群では、スコアがアップした者の36.0%（それぞれ20.6%、15.4%）、スコアがダウンした者の25.9%（それぞれ14.8%、11.1%）と、上位群の回答の割合を大きく下回った。

このことから、高校で成績が上位であり、適応度が高かったと主観的に回答した者ほど、大学入学時の英語プレースメントテストのスコアが高く、さらに入学後にスコアが上昇する傾向にあることがわかった。

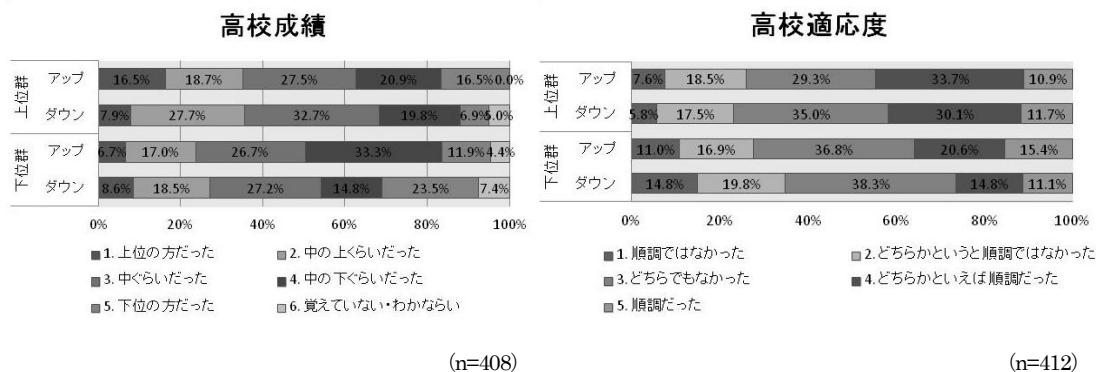


図 4. 高校での適応度（得点変化別）

### 3.2.2 学習時間

学習時間に関する設問は、「大学で自習している一日の平均時間はどれくらいですか」と問うものと、「大学外で学習している一日の平均時間はどれくらいですか」と問うもので、学生は、「1. 30分未満」、「2. 30分～1時間」、「3. 1時間～1時間30分未満」、「4. 1時間30分～2時間未満」、「5. 2時間以上」から最もあてはまるもの1つを選んで回答する。

学習時間について、第1回・第2回英語プレースメントテストの得点変化別に見た各設問の回答の割合を図5に示す。学内での自習時間（授業時間を除く）を問う設問では、第1回英語プレースメントテスト上位群（回答平均1.8）の方が下位群（回答平均1.5）に比べ、自習時間が長いと回答した。得点変化別では、第1回英語プレースメントテスト上位群で第2回でスコアがアップしたグループ（回答平均1.9）の方がダウンしたグループ（回答平均1.7）に比べ自習時間が長いと主観的に回答する傾向にあった。一方で、下位群では得点変化別に大きな差は見られなかった（平均1.5）。さらに、学内での学習時間が30分未満であると回答する割合が、上位群よりも下位群において、また、スコアがアップしたグループよりもダウンしたグループにおいて高く、上位群でスコアアップしたグループは50.0%であるのに対し、下位群でスコアダウンしたグループは65.4%が学内の学習時間が30分に満たないと回答した。

学外での学習時間を問う設問では、上位群（回答平均2.1）の方が下位群（回答平均1.9）に比べ、学習時間が長いと回答した。得点変化別では、上位群では第1回・第2回英語プレースメントテストでスコアがアップしたグループ（回答平均2.3）の方がダウンしたグループ（回答平均2.0）に比べ学外での学習時間が長いと回答した。下位群でも同様に、スコアがアップしたグループ（回答平均1.8）の方がダウンしたグループ（回答平均1.6）に比べ学外での学習時間が長いと回答した。さらに、学外学習時間が30分未満であると回答した者の割合が、上位群よりも下位群において、また、スコアがアップしたグループよりもダウンしたグループにおいて高く、上位群でスコアアップしたグループでは28.3%であるのに対し、下位群でスコアダウンしたグループでは60.0%もが学外の学習時間が30分に満たないと回答した。

このことから、学内外問わず、学習時間が長いと回答した者ほど大学入学時の英語プレースメントテストのスコアが高く、さらに入学後にスコアが上昇する傾向にあることがわかった。

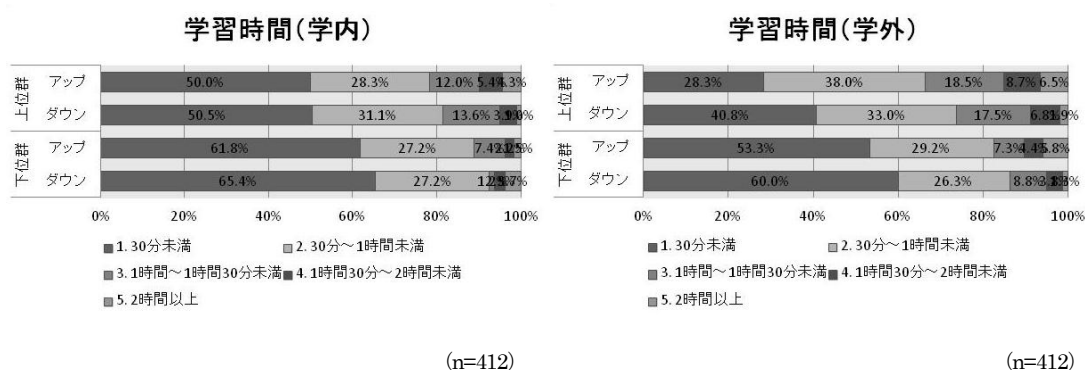


図 5. 学習時間 (得点変化別)

### 3.2.3 学習動機

英語の学習動機に関する設問は、「あなたは在学中に下記のようなことを実現したいと思っていますか」というもので、資格や免許、成績、アルバイト、クラブ・サークル活動等に関する a から n までの 14 の下位項目について、学生が実現したいと思う気持ちの有無を問うものである。学生は各項目について、「1. ない」、「2. どちらかといえばない」、「3. どちらともいえない」、「4. どちらかといえばある」、「5. ある」から最もあてはまるもの 1 つを選んで回答する。ここでは、そのうち「外国の大学へ交換留学生として留学したい」、「外国旅行に行きたい」という 2 項目を取り上げる。

英語の学習動機について、第 1 回・第 2 回英語プレースメントテストの得点変化別に見た各設問の回答の割合を図 6 に示す。外国への留学意識を問う設問では、第 1 回英語プレースメントテスト上位群（回答平均 2.8）の方が下位群（回答平均 2.6）に比べ、留学の意識が高いと回答した。得点変化別では、第 1 回英語プレースメントテスト上位群で第 2 回でスコアがアップしたグループ（回答平均 3.0）の方がダウンしたグループ（回答平均 2.6）に比べ外国への留学意識が高いと回答した。下位群についても同様に、スコアがアップしたグループ（回答平均 2.5）の方がダウンしたグループ（回答平均 2.4）に比べ外国への留学意識が高いと回答した。回答の割合は、「4. どちらかという」としたい、または「5. したい」と回答したのが、上位群では、スコアがアップした者は 41.1%（それぞれ 15.2%、23.9%）であったが、スコアがダウンした者は 27.2%（それぞれ 12.6%、14.6%）とそれを大きく下回った。下位群においても同様に、スコアがアップした者は 19.9%（それぞれ 11.8%、8.1%）であったが、スコアがダウンした者は 14.8%（それぞれ 8.6%、6.2%）とそれを下回った。

外国旅行に対する意識を問う設問では、上位群（回答平均 4.0）の方が下位群（回答平均 3.6）に比べ、外国旅行したいと回答した。得点変化別では、上位群では大きな差は見られなかったが、下位群では第 2 回英語プレースメントテストでスコアがアップしたグループ（回答平均 3.5）よりもダウンしたグループ（回答平均 3.8）の方が外国旅行をしたいと回答した。さらに、外国旅行をしたいと回答した者の割合が、上位群よりも下位群において、また、スコアがアップしたグループよりもダウンしたグループにおいて高いという特徴が見られた。

このことから、海外留学に対する意識が高い学生ほど入学時のスコアが高く、入学後にスコアが上昇する傾向にあることがわかった。また、外国旅行に対する実現意識が高い学生の方が、入学後にスコアが下がる傾向が顕著であることがわかった。

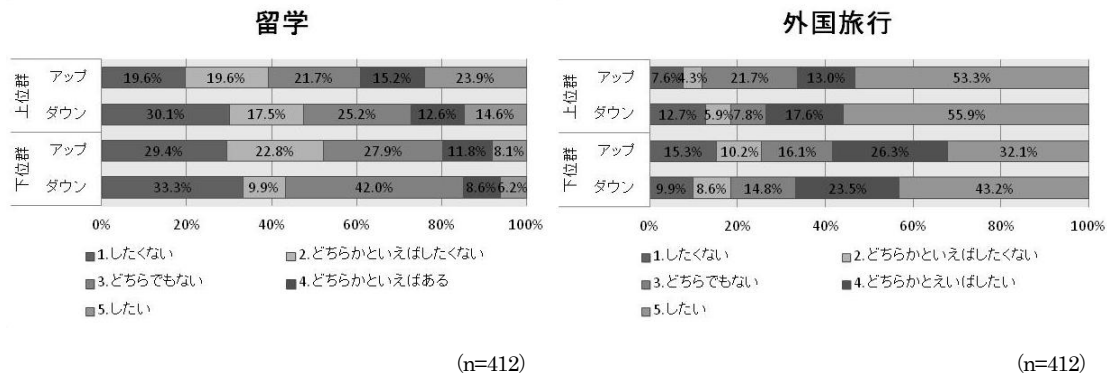


図 6. 学習動機 (得点変化別)

### 3.3 英語プレースメントテストと適応度の相関

以上、適応調査の結果から、高校の成績が上位で適応度が高いこと、学内外の学習時間が長いこと、海外留学に対する意識が高いことが、大学入学時の英語プレースメントテストのスコアが高く、かつ入学後に同テストのスコアが上昇している学生の特徴であることがわかった。表 10 は、本節で扱った適応調査の 6 項目と、第 1 回・第 2 回英語プレースメントテストのスコアおよびその得点変化との相関を示したものである。これにより、第 1 回・第 2 回英語プレースメントテストのスコア (0.744) や、学内・学外学習時間 (0.446)、外国留学と外国旅行の意識 (0.463) 等の項目が、互いに相関が強いことがわかった。ここから、外国旅行の意識が高い学生は留学意識も高いこと、学内学習時間が長い学生は学外においても学習時間が長い傾向にあることがうかがえる。また、入学後の英語プレースメントテストの得点変化と比較的相関が見られるのは、学外の学習時間であることが明らかになった。

表 10. 相関係数

	zスコア (第1回)	zスコア (第2回)	得点変化	Q14 高校成績	Q16 高校 適応度	Q19 学習時間 (学内)	Q20 学習時間 (学外)	Q26d 留 学	Q26f 外国旅行
zスコア(第1回)	1								
zスコア(第2回)	<b>0.744</b>	1							
得点変化	-0.314	0.400	1						
Q14 高校成績	-0.192	-0.141	0.064	1					
Q16a 高校適応度	0.126	0.074	-0.067	<b>-0.522</b>	1				
Q19 学習時間(学内)	0.175	0.159	-0.015	-0.049	0.047	1			
Q20 学習時間(学外)	0.202	0.243	0.068	-0.099	0.128	0.446	1		
Q26d 留 学	0.158	0.190	0.054	-0.125	0.080	0.227	0.202	1	
Q26f 外国旅行	0.213	0.133	-0.104	-0.080	0.119	0.157	0.120	<b>0.463</b>	1

(n=403)

#### 4. まとめ

本稿では、関西国際大学において英語プレースメントテストとして実施されている G-TELP の上位・下位別の特徴および第 1 回・第 2 回受験時の得点変化と、同大学で 1 年次生を対象に実施されている適応調査との関連を見た。これにより、大学入学時の英語プレースメントテストのスコアが高く、かつ入学後にスコアが上昇している学生の特徴として、以下に挙げる傾向があることが明らかとなった。(1) 高校での成績が上位である。(2) 高校での適応度が高い。(3) 大学入学後の学内外での学習時間が長い。(4) 外国留学に対する意識が高い。中でも、英語プレースメントテストの得点変化と最も関連があるのは、学生の学外での学習時間の長さであることがわかった。以上で得られた結果は、学生の学外での学習時間の確保や、学生への外国留学の情報提供等による学習の動機付けなど、学生の学習成果を向上させる具体的方策へと活かしていくことが今後期待できるだろう。

---

#### 注

<sup>1</sup> 高等教育における人材育成の多様性をふまえつつ、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」人材を育成するという観点から、教科内容の改善や大学間の協力体制の構築、大学教員養成のあり方等について改善を促すもの (<http://www.e-jes.org/03033102.pdf>)。

<sup>2</sup> G-TELP スコアおよび適応調査データについては、関西国際大学高等教育研究開発センターよりデータの提供を受けた。データは、スコアを数値に換算するなどして個人が特定されないように配慮した。

<sup>3</sup> 平成 21 年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」採択の、同志社大学、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学の国公私立 4 大学連携による『「一年性調査 2009」調査報告書』(同志社大学高等教育・学生研究センター (編) (2010: 60)) において、同様の報告がなされている。これによると、CEFR (Common European Framework of Reference for Language: Learning, teaching, assessment, 外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠) を用いた学生の英語運用能力の習得状況の確認の結果、1 年生の入学時 (4 月) と、入学から半年以上経過した調査時 (11 月から 12 月まで) の 2 時点を比較した場合、「概して入学時に初級レベルだった者ほどレベルが高まる一方で、高いレベルに到達していた者ほど入学後の能力低下が目立った」ことなどが主だった傾向として報告されている (同志社大学高等教育・学生教育センター (編) (2010), p.60)。

#### 参考文献

- 井上加寿子：「英語プレースメントテストと適応調査に関する分析」『教育総合研究叢書』4, 83-95, 2011-03-31 2011
- 同志社大学高等教育・学生研究センター (編)：『「一年性調査 2009」調査報告書』平成 21 年度文部科学省大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出—国公私立 4 大学 IR ネットワーク」 2010

## Abstract

This paper analyzes the results of *General Tests of English Language Proficiency*, or G-TELP, and *Freshman Survey 2011* which were conducted at Kansai University of International Studies in 2011. *Freshman Survey 2011* asks the students 35 questions such as how they study at high schools, how long they study at the university, whether they want to study abroad or not, and so on. The results of the analysis show that the students who succeeded in high schools, study longer at the university or home, and have strong motivation to study abroad, tend to show remarkable progress in English competency after they enter the university.